

戦争そのものは自然な人の営みと言える。人類の歴史は戦争と死と愛と文化そのものである。かつて大統領にもなる可能性のあった少年は、その年齢に比例しない考えを形成させた。

幼名ハバナ。実名ガルンシア。またの名を麻薬帝とする老人は、今もなおその考えを改めずにいる。そも、改める機会などこれまでになく、修羅場を超え、巨万の富を得て、地位を高め、悪行を尽くし、善行に奉仕し、誰にも所在地を明かさず隠居した今ですら、その考えをより深くする。

むしろ、その考えが自身をここまで連れてきたのだとすら確信している。

当時所属していた組織を裏切る決意を自室でした直後、彼は実母を殺害した。心臓を背後から突き刺した。彼はよくよく位置を確かめてから実行した。何度も他人を刺し殺していた彼には心臓の位置など透けて見えるようであったはずだが、位置を何度も確かめたのは実母殺害という行為の出所が思いやりと愛だからだった。もし仮に自身がしくじった場合、愛すべき母親が死ぬよりもひどい目に遭わされることが明らかだったうえ、母親を人質に盗られた場合、自分の判断が揺らぐ可能性が十二分にあると考えたための判断だった。もちろん、母の埋葬は丁寧にいった。また一生分の涙が伴った。ガルンシアはそれ以降泣いていない。

そのような経験を以って、殺害と愛が結びつくこともあるのだと理解したのは三十一歳の頃だった。

善行に奉仕するようになったのは政府すらも手中に置き、飼い殺しにできるようになった五十歳ちようどになった頃だった。

首都から離れたいまだ文明の行き渡らない農村に、町へ続く街路を舗装した。コンクリートで固めた道ではなく、碎石を敷いた道を全長五百五十六キロメートルにわたって作った。コンクリートではなく碎石を用いたのは田舎民でも容易に管理と保全を行えるようにすることを考えてのことであり、それは貧相な田舎者たちに安定した賃金を手に入れるための職を与えた。安定した収入は窃盗や略奪を減らし、治安の安定化に作用した。ガルンシアは独りよがりで勝手な偽善ではなく、理論的で経済的で健康的な善行を行った。信じられないことに、麻薬帝と称される人物の銅像が田舎各地に建てられた。

そして今、南の島で晴耕雨読の日々を送るガルンシアの前にマチェーテを持った女が現れたのを見て、ため息を吐いてから微笑を浮かべた。彼は自身の隠居する場所を信用のおける長男にしか伝えていなかった。

ため息は裏切りに対する怒りであり、微笑は自身の考えが正しいことが立証されたことへの喜びだった。

麦藁帽をかぶったガルンシアは日差しを浴びながら哲学書を読んでいたが、それを閉じると麦わら帽子を外し、その中に隠していたおもちゃのような拳銃を取り出し、女に向けた。

女は驚いた。何の備えも無いと判断しての計画の実行だったからだ。

麻薬帝は長男を殺す覚悟をしながら、引き金を五度引いた。男は涙していた。